

# 鳥取神青通信

第6号

発行元 鳥取県神道青年会  
編集 鳥取県西部青年神職会

## 「氏青神青合同 研修会を終えて」

鳥取県神道青年会会長  
青 砥 一 彦



五月二十九日三十日の両日に亘り、鳥取県神道青年会氏子青年会を主管として第三十二回中国地区氏子青年・神道青年合同研修会を開催いたしました。

当日は百四十名という多数のご参加を戴き、成功裏に研修会を終えましたことをまずはご報告申し上げます。執行部と致しまして、合同研修会準備委員会（仮称）を設け、関係各位のご協力の下、準備を進めて参りました。その中で最大の問

題でありました開催に関する費用につきましても、神社庁の拠出金を満額予算組して戴きましたり、各宮司様よりのご寄付を頂戴できましたこと、どうか面目を保つこともできました。この場をお借りしてまずは各位のご厚意に厚くお礼申し上げます。

今回参加された方々は皆、我々と同じ神職であり、敬神の念の篤い氏子の方々でした。その皆様が、研修会終了後心よりのお礼を言って帰っていかれました。これも偏に会員各位のご努力の賜と思えます。研修会開催前に、見た目の豪華さではなく遠来の友を迎える様に細やかな気遣いを求めましたが、そのことを皆様が善く実践して戴いた事の証だと思えます。本当に有り難う御座いました。この研修会の第一の目的は当然神道に係わる者の研鑽ですが、それ以上に、同じ道を目指す者としての連帯感を高めるものでもあるのです。

願わくば、今回の研修会開催で得た経験や連帯感を、今後の神道青年会の運営に生かして頂ければ、会長職を務めた者として、この上の喜びに尽きるものはありません。

## 祭 女 神 事

鳥取県西伯郡大山町孝麗山(七五二)の東北山麓に「宮内」という戸数三〇〇戸の小集落がある。山麓には大小約百

余基の古墳が密集していることより、この付近は古代から人の生活の場となっていたことが想像される。

この部落の東南端に高杉神社という一社がある。この神社には古くから「嫩神事」という珍しい神事が行われ近郷の話題となっている。

この奇祭が果していつの頃から行われていたのか正確な記録がないので明かではないが当社に保存されている祭伝記並鳥取県神社誌によれば、室町時代以前から行なわれていたのではないかと思われる。

この神事は毎年の例祭の時氏子中より三名ずつ輪番制で打神(霊代人)を選出し奉仕することに成り立っている。打神は神霊により神懸りの状態となり打合を行なうという珍しい神事であるが、終戦後

色々な事情により十余年间断していた、その間部落内に不祥事(病人等が続出)が次々とおこるようになり氏子合図り、今後四年に一度(旧暦閏年)実施することになり現在にいたっている。

創立年月日は不詳であるが昔から藩主の祈願所として社領三石八斗七合を受け、武門武將の崇敬も厚く、神社の棟札や古文書にも元汗入郡大社あるいは高杉郷大社と記されている。

慶安二年(一六四九)丑十一月、現在地に移転再興したと書いた棟札もある。また、神事の由来については次のように記されている。

雄略天皇丙辰の年、神々の怒にふれ、地方住民が次々と災難に遭って大変心を痛めた。そのとき、当社の御神託に二人の官女、松姫命と千代姫命の靈魂が、細姫に対する嫉妬のたたりであるとのこと、よってこれを神社に祭祀し、お告げのままに宮殿を建てて、

一ノ御前社(細姫本殿) 二ノ御前社(松姫命仲殿) 三ノ御前社(千代姫命末殿)

を奉斎し、祭日に嫩神事を齊行したところ、神慮がやわらぎ、幸せに生活することができるとなったという。その神事が今にいたるまで受け継がれている。

当社の古書類は毛利、尼子の兵乱のためほとんど焼失したが、幸兵火を免れた随神の古神像二体が現存している。

また元禄二年（一六八九）

までは高杉郷八か村の鎮守氏神であったが、孝霊山牧草採取について山論があり、坊領佐摩、今在家は大山領であったがため、坊領に神社を創立し氏子を離れ、続いて平、中高、神原、長田も分離した。しかし祭はその後も同日に行ない、総氏神として尊信した。大正元年十月三十一日、宮内村邸鎮座一ノ御前社、宮内字早稲上鎮座の二ノ御前社三ノ御前社を合祀、さらに、大正二年十月、平字村屋敷鎮座の平神社、宮内字村屋敷鎮座の荒神社をも合併した。その後昭和二十六年三月三十一日平神社は再び分離して元の位置に奉斎することになった。

## 伯耆圏の民俗行事

本県の最西南端に位置する日野郡日南町に「ホトホト」と呼ばれる正月の行事が残っている。この行事は、四十二歳の厄年を迎えた男性とその家の厄落としをする伝統行事で来訪者を疫病神に見立てバケツの水をかける事により厄を祓う珍しい行事である。古くから一月十四日に行われ、かつては町内のいたるところで盛んに行われていたが戦中・戦後にはすたれてしまい現在では同町の多里（たり）地区がその伝統を伝えている。当日厄年に当たる本人宅では夕方になると近在の親戚縁者らが大勢で押しかけ祝いの酒盛りをはじめ、宴もたけなわの頃、疫病神役の若者数人が縁起物の藁細工の馬・せにつなぎ（植物）・松竹梅で作った飾り物などをザルにいれ訪問、縁側に備え「ホトホト」と大声で唱え来訪をつけると素

早く物陰などにいったんは隠れる。待ちかまえていたその家の家族はそのザルに用意しておいた、お神酒・肴・餅・祝儀などを入れておく。再び疫病神役の数人がザルを持ち帰ろうと姿を現すと家人が一斉に水をかける。疫病神達はしぶぬれになりながら逃げ回る。かつては若者達が最も楽しみにしていた行事であった。あくまでも私見であるが、おそらく疫病神役の若者が持参するザルにいれた縁起物は祓いの為の贈物であり素盞鳴尊の高天之原追放の段の「科するに千座置戸を以てし、遂に促め徴る。髪を抜かしむるに至り、以て其の罪を贖はしむ。亦、其の手足の爪を抜きて之を贖はしむとも曰ふ。已にしてつひに逐降ひき」に通ずるものがある。また疫病神役が「ホトホト」と大声で来訪を告げる言葉も「陰登・陰登」で、女陰を表現する言霊の呪力により厄を

祓うと考えれば天照大御神や天之石屋戸との関連も興味深いものがある。さらに親戚縁者が集う祝いの酒盛りも天宇受賣命が神懸かりをして踊るのを見た神々が共に笑う様のものである。人の一生は、水の儀式とかかわりも深く誕生すればすぐさま産湯を使い嬰兒に生命力を与え、死しては末期の水で生命の蘇生を願い、また永の別れを惜しむ惜別の水ともなる。厄男の家人が疫病神に水をかけるのも生命の浄化（禊祓）と更新（若返りの呪力）を願う意味があろう。雪深い山里の人々のこうした何げない行事の中にも神話の一齣が見え隠れし、神々の「み手振り」が現今に再現されているのである。

西部青年神職会

木山 典明

## 氏子青年会の活動について

### 活動について

私達氏青は、年中行事を

とおして、子ども達とのふれあいを、大切に行っています。

節分祭では、会員が赤鬼、白鬼に扮装し、子ども達が、この鬼に向って豆撒きを行い、映画も上映して、楽しい一時を過ごします。

六月の輪くぐり祭では、金魚すくい、焼そば、フラックフルト、ソーセージ等の模擬店を出し、収益金は、初詣時の雑煮の餅米等の費用に充当しています。

七夕祭では、事前に五十個位の行燈を組立て、八月七日その行燈に子ども達の願い事を書いてもらい、点灯し参道に吊し夏の夜を彩ります。屋外にて映画も上映。かき氷、フライドポテト等も出店します。七夕飾りも、各家庭より持参してもらい、境内に立てて、翌日、清祓を受け焼却していただきます。

正月行事は、大晦日午後十時半より、年男年女の人を集合してもらい、お祓い

を受け、白尾神社から西灘神社へ、神輿に鏡餅を乗せ担ぎ町内を一周します。午  
前零時より福餅つきと称し  
て、三十kgの餅をつき、雑  
煮にして千五百杯ぐらい参  
拜者に振舞います。

この様に、伝統行事を、  
子ども達に踏襲させ、やさ  
しい心づくりを、目ざして  
います。

現在会員は十七名で、年  
会費四千元で、自分達の力  
に依り、神社を母体として、  
地域に根ざしたボランティア  
活動を行っています。

他には、四月の花見は会  
員ファミリーで焼肉パー  
ティーを開き、家族間の親  
交を深め、八月には氏青O  
Bを交え、境内整備の後、  
親睦会を行っています。

氏青は県内では二会しか  
有りません。青年神職会の  
皆様のご尽力により一会で  
も多く出来る事を、よろし  
くお願い致します。

白尾西灘両神社氏子青年会々長

南家 純悟

### 東・中・西単位の会の取り組み

#### 東部若葦会

平成十年度の若葦会卓上  
研修会は、テーマを普段よ  
く話し合う、神明ご奉仕の  
ことにこだわらず、少し視  
野を広げ「血液について」  
「環境ホルモンについて」を  
テーマに取り上げて開催し  
ました。

このような変わったテー  
マを選んだ経過として、会  
員に普段から関心のある事  
柄を聞き集め、みんなで話  
し合ってみることで、これ  
からの神明ご奉仕のうえで  
少しでも役に立つような、  
新しい発見があればと考え  
ました。

しかし資料もなく雑談し  
ても、あまり有意義でない  
ため、初めに会員でこのよ  
うなテーマに関係する仕事  
に従事している方に、資料  
を用意してもらい、それを  
もとにいろいろ話をしても  
うりました。

さすがに、専門的な話が  
多く難しいところもありま  
したが、初めて知ることば  
かりでとてもためになった  
と思います。

その後みんなでいろいろ  
と話し合いをしましたが、  
その中でも普段あまり聞け  
ない、そのような専門の仕  
事をするうえでの余談話し  
なども聞け和やかな話し合  
いができ、結構楽しい時間  
を過ごしました。

この度は、残念なことに  
出席者が都合で少し少なめ  
ではありましたが、かなか  
かよい研修会であったと思  
います。これからも、この  
ような視野が広がる、少し  
変わった研修会もまた企画  
したいと思っています。

#### 中部青年神職会

平成十年七月十日鳥取県  
神道青年会総会を開催。平  
成九年度の決算、事業報告

の承認、及び平成十年度の  
予算事業計画を決定。これ  
で、今年度の活動をスター  
トした。

十月二十日、鎮霊神社秋  
季大祭に奉仕。参加者五名。  
平成十一年二月六日、中  
部青年神職会臨時総会（第  
三十二回中国地区氏青神青  
合同研修会助成金募金計画  
について）及び新年会を開  
催。募金方法を決定した。  
これを受けて、担当者が募  
金活動を開始した。

二月十一日建国祭典奉  
仕。東伯町八橋に後鎮座坐  
す諏訪神社にお願いし、参  
加者六名。四月末に二月十  
一日、中部青年神職会独自  
の取り組みとして毎年恒例  
の建国祭典奉仕を計画し  
たが、会員の日程が折り合  
わず、四月実施を見合わせ  
た。六月以降の開催を予定  
している。

総じて、今年度の活動は  
前年度に比べ、会員の参加

も少なく、活発な活動とな  
らなかつた。一部の会員か  
らは、会議中心の集まりや、  
会員だけの活動ではなく、  
会員の家族を巻き込んだ、  
工夫を凝らした活動を盛り  
込み、活性化を図ることが  
必要であるという意見も出  
されている。

#### 西部青年神職会

西部青年神職会の活動は、  
主に氏青、神青合同研修会  
の打ち合わせ等で、日程的  
に詰まってしまう、今年度  
は事業計画通りにはいきま  
ませんでした。これは、全て  
会長である私の怠慢が原因  
でした。会員の皆様には大  
変ご迷惑をおかけしました。  
活動報告はありませんが、  
私が今感じていることを書  
かせてもらいます。私達神  
社界はなぜ教化活動が下手  
なのか。中には地域、総体、  
氏子の皆さんと上手に付き  
合っておられ、うまく神社  
と結びつけて活発に活動を



西部青年神職会 会長  
塚田義史

以上  
されている宮司さんもおられますが、大半の宮司さんは苦勞していらつしやるのではないのでしょうか。私もその内の一人です。私の場合、主が会社人従が神職とゆう生活をしていますので自分自身に神職とゆう自信が未だに持てず、総代、氏子の人達に自分の思いをうまく伝えることが出来ず苦勞しています。また自分が奉仕している神社のことを充分に把握してないこと、この二点が大きな原因だと思ひます。私の場合ある程度原因が分かつて来ましたので、この二点を早く克服して教化活動を実行していこうと思ひます。

新入会員紹介

氏名 田中正臣

(たなか まさおみ)

東部若輩会

奉務神社

犬山神社



私が、神職として御奉仕させて頂いて半年以上経ちましたが、まだこの因幡地方の奏伝楽等一生懸命覚えている所です。これからも助勤に行く事が有れば各神社の色々なやり方を勉強し、氏子の人達から信頼される様な神職を目指して神明奉仕に尽力していきたいと思ひます。

平成9年度決算及び10年度予算書

〔収入の部〕

項目	10年度予算額	9年度決算額
会費	102,000円	105,000円
助成金	210,000円	210,000円
雑収入	20,000円	30,000円
繰越金	154,835円	62,880円
合計	486,835円	407,880円

〔支出の部〕

項目	10年度予算額	9年度決算額
總會費	30,000円	5,000円
役員会費	30,000円	20,392円
事業費	150,000円	30,000円
対外派遣助成費	140,000円	80,000円
事務費	25,000円	23,653円
神青協負担金	54,000円	54,000円
地区負担金	30,000円	30,000円
特別積立金	10,000円	10,000円
予備費	17,835円	0円
合計	486,835円	253,045円

平成10年度鳥取県神道青年会事業計画書

重点目標

- 一、神道青年としての意識の昂揚と自己研修の実践
- 二、単位会の相互交流を進める
- 三、神青協活動方針事業計画に基づき活動を進める

事業

- 一、県神青通信第六号の発行(西部担当)
- 二、中国地区氏青・神青合同研修会(当県担当)
- 三、神青協創立五十周年記念事業
- 四、単位会における事業の推進

神祇問答より

「シデ」について

シデとは古事記の岩戸隠れの條に「五百津まさかきの下枝には白にぎて青にぎてを取りしで」とあるように垂れるという意味で、繩につけて垂れることからシデといい、垂紙や四手という文字をあてます。

シデはもとと穀(かじ)を織ったものを用いたのが、後に麻や絹に変わり、今日普通に見られるように紙を代用することとなったのです。

シデの用法としては玉串に付けて幣帛として奉られる場合と、注連繩に付けて用いられる場合があります。注連繩に付けて用いる場合には神に捧げるものという意味ではなく、注連繩の所在をはっきりするための標識と考えられます。

編集後記

今年度は、中国地区氏青神青合同研修会という大事業がありました。県内の氏青と神青のメンバーの協力のもと、成功裏に研修会を終えることができました。

今後とも両会の活動が益々盛んになりますことを願ってやみません。